

心の琴線にふれる土木遺産

生き続ける土木遺産

およそ2000年前には、地中海全域からヨーロッパ、北アフリカ、中東までを範囲とした「民族、宗教、文化」の違いを超えた巨大なローマ帝国が形成されていた。

その頃、首都ローマでは神殿や競技場などの建築物や道路・下水道等の土木施設が造られ、電気製品をのぞけば現在とほぼ同じように快適な生活が営まれていたと言われる。そして、その高度な文明は現代に至るまで生き続けている。

たとえば、現代の道路はローマ帝国時代に建設された道路網がベースとなっている。また送水のための水道橋や広場に設けられた噴水、あるいは石づくりの橋、自然の地形を活用した公園などは今も健在であり、これらの土木施設がその土地固有の地域らしさを醸し出して

いる。

日本でも同様にその昔造られたものが地域のシンボルとなっている例は多い。

人々はいずこにおいても、自然を相手として技術を磨き、自然を利用し、その土地独自の工夫を重ねながら土木施設を造った。そしてその施設は時間を経るとともにその土地になじんでいる。

土地になじむ技術

古い時代に造られた橋やダム、運河、鉄道、道路、堤防、港、川等の土木施設は、地域の顔として、また、人々の生活のための道具としての役割を担っているものが多い。

しかしながら、近年の土木施設についてみるとデザ

インは確かに斬新でスッキリしているものの、何故か心の琴線にはふれてこない。

現代の土木施設は無駄のない効率的なものである反面、「土地になじむ」という点では物足りなさを感じてしまう。

たとえば、川について言えば、「川らしい川をつくりましょう」と言っても、結局どこかで見たような画一的な川になっているのは否めない。記憶の中でその地域の人々の心を彷彿とさせる川は、「何もしない」田舎の川の場合が多いのは何故だろうか。その地域にあった地域らしさを醸成することのできる技術に再度挑戦していくべきではないだろうか。「地域の風土や自然」とじっくり向かいあうのも技術の一つである。

先人の知恵に学ぶ

土木施設は完成と同時に老朽化がスタートする。現代まで存続した土木遺産の多くは設計、施工の的確さもさることながら、継続的な維持・補修も不可欠である。

今、私たちは人間の英知を注いだ土木施設の「存続と技術の伝承」のために何らかの形で動き出す必要がある。そのためには、まず身近な土木施設について、その歴史や周辺の自然を勉強することから始めてはどうか。先人たちは何を思い、何を苦しみ、工夫したのか。そして、その施設がその地域とどう関わってきたかなど、「地域の土木遺産」をじっくりと見てはどうだろうか。



小松 豊
KOMATSU Yutaka
会誌編集委員長